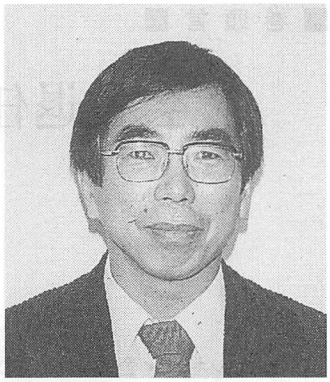
■巻頭言■

# 新会長挨拶



エネルギー・資源学会 会長
慶應義塾大学大学院教授
茅　陽　一

1997年度からエネルギー・資源学会の会長をお引き受けした．大変名誉なことと感じている．考えてみると，故水科篤郎先生（京都大学）から私に学会前身のエネルギー・資源研究会の発起人の一人になれ，というお話を頂いたのはもう18年も前になる．たしか発起人は7人で渡辺茂先生や笠井章弘さんなどもメンバーだったのだが，いづれも故人になられてしまった．この研究会は当時行われていた文部省のエネルギー特別研究会の横のささえとして発足したのだが，今やエネルギー研究を横断的に結ぶ学会として周知され，2000人を超える会員，200社に及ぶ賛助企業を擁する学会にまで発展している．まことに慶賀の至りである．

この学会の活動は多岐にわたっているが，やはり中心になるのは学会誌と4月の研究発表会，2月のエネルギーシステム・経済コンファレンス（1998年からこの名称に環境の文字を挿入することに決定）だろう．学会誌では，毎回テーマをきめて特集をしているのだが，これは今みても大変よいアイデアで，私はエネルギー分野で何か最近の状況を知りたい問題があると，まず学会誌のバックナンバーをひもとくことにしている．勿論電気，機械，化学などのこの学会の親ともいうべき大学会の機関誌もあるのだが，過去の経験ではこの「エネルギー・資源」が一番役に立つような気がする．また，研究発表の方は，最初研究発表会だけだった．しかし，システム・経済的研究の発表の場を作ることも重要だと思い電力中央研究所，エネルギー経済研究所にも働きかけて設置したのがさきのコンファレンスで，これは大成功だった．年々参加者，論文が増え，今年は100件に近い発表だという．

このような活動の活発さは，やはりこの分野がきわめて学際的で，横断的討論の場が求められていることの反映といえるだろう．特に，最近は温暖化問題というエネルギー・経済・社会を総合的に考えなければ答えが出せない問題が登場し，その学際的議論の場としてもエネルギー・資源学会は重要な位置を占めるようになってきている．

私としても，こうした学会の学際的側面は今後ますます重要になるであろうし，また扱う問題のグローバルなひろがりを考慮すると，国際的な接触を増やすことについて大いに努力をしたいと考えている．その意味で昨年から始まったElsevier出版社との提携も大変有意義なことであろう．

最後に，今後の学会の発展のための会員諸兄の学会諸活動への一層の関心と積極的参加をお願いして挨拶としたい．